

宗祖の論註の合揉の文について

森
慶樹

宗祖の論註の合揉の文について

序

宗祖は『本典』の『信卷』と『証卷』に、『論註』の浄入願心章と利行満足章の文を合揉して成文し、「爾者若行若信…」「故若因果…」等の御自釈をなされている。それらの『論註』と『本典』の文は以下の如し。

○論註の文

〔浄入願心章〕

「此の三種の莊嚴成就是、もと四十八願等の清浄願心の莊嚴したまふ所なるに由て、因浄なるが故に果浄なり、因无して他の因の有には非ざるなりと知るべしと也。」
(『聖典全書三卷』411頁)

〔利行満足章〕

「菩薩は出第五門の廻向利益他の行成就したまへりと、知るべし。
成就是、謂く廻向の因を以て教化地の果を証す。若しは因若しは果、一事として利他に能はざること有ること无しとなり。」

(『同』422～423頁)

○宗祖の文

宗祖は、『本典』に於てこれらの『論註』の二文を合して次の文を成文された。

〔信卷〕

「爾れば、若しは行、若しは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふ所に非ざること有ること無し。因无くして他の因の有るには非ざる也と、知るべし。」
(『聖典全書二卷』79頁)

〔証卷〕

「夫れ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。故に若しは因若しは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへる所に非ざること有ること無し。因浄なるが故に、果亦浄也。知るべしとなり。」
(『同』137頁)

本論文は、これらの関係及び義の相承に就いて考える。

一、従来義

従来の考えでは、宗祖は『論註』の文を如来回向義をもつて独特な読みをされ、これを以て浄入願心章と利行満足章

の二文を合採して、『信卷』と『証卷』に御自釈の文を製作し、『論註』に蘊在する如来回向の義を示されたものとされて来た。この義が分かりやすいものとして、大派の深励師の『浄土論註講義』の文を示す。

「廻向因」と云ふは因の五念門の中の第五の廻向門。「教化地果」と云ふは園林遊戲地門なり。「若因若果等」。其の因も果も利他なりと也。∴『證卷』には「若因若果 ∴ 廻向成就」との給ふ。これ此処の若因若果の言を転用して衆生往生の因果のことにし給ひ、衆生往生の因も果も悉く弥陀の利他廻向と云ふ文にし給へり。其の外『信卷』の「若行若信」、『略文類』の「若往若還」等の御言はみな此処の語勢を取り給ふなり。」（『浄土論註講義』695頁）

深励師は、これら宗祖の信証二卷の文に示される義は、『論註』の文の当面にはなく、宗祖は『論註』の文言を転用したり、その語勢を取つて、独自の義を示されたと見なされるのである。

然るに、「言を転用」とか「語勢を取」と云えば、宗祖は『論註』の文の本来にはない義を、本典で示されたことになる。これは云いすぎではないか。『論註』の文を用いられたならば、その義も用いられていると考えるのが当然である。

従来義と相違して筆者の立義では、如来回向の義は、『論』『論註』の上に明らかに確認されるものと見る（拙論『他力回向の研究』『論註の善巧撰化以下の菩薩について』を参照）。この立場から、『論』『論註』の文から宗祖の合採の文への義の相承を理解していく。

二、二重否定の表現

先ず『論註』の二文を正確に読むことから始める。(拙論『他力回向の研究』も参照)

「因无くして他の因の有るには非ざる也」(浄入願心章)

「能はざることを有ること無しとなり」(利行満足章)

これら否定が重なって一見冗長に見える文は、二重否定の強調文と考えるべきである。二重否定の強調文の身近な例を挙げれば、『努力無くして成功が有ることは無い』とは『努力が有ればこそ成功が有る』の意となるが如しである。

○利行満足の文

先ず、『論註』の利行満足章の文、「若しは因若しは果、一事として利他に能はざること有ること無しとなり。」を正確に読むことを考える。

この二重否定の文は、これを簡潔に読んでしまえば、『因果は利他に由る』となる。何故そう読めるのかというと、『論註』の文を読むには、『論註』自身の読み方に随うのが最も確実である。その読み方とは、利行満足章に、

「自利に由る故に則ち能く利他す、

∴ (1)

是れ自利に能はずして能く利他するに非ずと知るべしと也。」

∴ (2) (『聖全三』 422頁 番号筆者)

「利他に由るが故に則ち能く自利す、

∴ (1)

是れ利他に能はずして能く自利には非ずと知るべしと也。」

∴ (2)

(『同』 423頁 番号筆者)

等とあるが、これらの文の構造は、前(1)後(2)に同じ事が繰り返されて表現されていると考えられる。

(2)の文は、二重否定となっているが、これは、(1)の文と同意の文であり、同意の文を並べているのは強調する為である。即ち二重否定の文(2)は(1)の強調文と考えられる。即ち(2)は『く由るからこそする』という文意となるのである。

この読み方に准じて、次の利行満足章の後半の二重否定の文を読み直せば、

「謂く廻向の因を以て教化地の果を証す。若しは因若しは果、一事として利他に能はざること有ること無しとなり。」

(『同』 443頁)

『若しは因、若しは果、皆、利他に由るからこそ成就する』となる。さらに簡潔にすると、『利他に由るからこそ因も果も成就する』となる。

次にこの文の「廻向の因」と「教化地の果」に就いて考える。「廻向の因」とは前四念門である。何となれば、この四念門(行信)を以て往生し自利止観(宅屋二門)を修し、結果として「教化地の果」を成ずるからである。

よつてこの文の意味は、『行者の四念門と彼土の教化地の果は、皆淨土菩薩の回向（利他）に由るからこそ成就する』となる（拙論『他力回向の研究』も参照）。而してその菩薩回向（利他）の本は如来の本願力回向（利他）である。斯く考へた時、この文の意は覈求其本釈の『往生と彼土菩薩の起行は本願力に縁る』の釈と殆ど同義であることが知られる。

○淨入願心章の文

次に『論註』淨入願心章の、「因无して他の因の有には非ざるなり」（『聖全三』411頁）を読んでみる。
従来義では、これは四性計に簡ぶ文と見なし、暫く四計中の無因他因の二を出すとする。

「非無因他因有とは、上は正示で、此は簡非、即ち外道の非に簡ぶ、蓋し外道に對據するは四論宗の家風で、註主の本習ふ所、故に此言あるなり。」
（是山和上『往生論註講義』221頁）

しかしこの釈には無理がある。何故に四性計を、しかも二計のみを出すのであろうか。是山和上は次の様に会通されているが、

「問、何故ぞ自性及び共の計を非せざるや。答、菩薩所起の因縁に自共に似たるものあり、濫を恐れて言はざるなり。」
（『同』222頁）

この会通も無理がある。ここで四性計を論ずること自体、唐突と云わざるを得ない。そもそもこれでは内容として、宗祖の『信巻』の御自釈と関連がつかない。では、この文は如何に読むべきだろうか。

本論では、この文を先に述べた利行満足章の文と同様に、二重否定の強調文と理解する。そうすると浄入願心章の文『因無くして他の因の有るに非ず』は、『因有るからこそ、他の因が有る』となる。

この文の最初の「因」は如来（法蔵菩薩）の願心であるが、では次の「他因」は何を指すのであろうか。ここで却って『信巻』『証巻』の御自釈の文から窺うと、この「他の因」とは行信のことである。よってこれは『他の衆生の往生成仏の因（行信）』とするのが妥当であると考え得る（後に詳釈する）。故にこの文は、『清浄願心の因があるからこそ、他の衆生の往生成仏の因が成ず』という意味となるのである。

結果として二章の文の意味は次の様になる。

〔利行満足章の文〕

「若しは因若しは果、一事として利他に能はざることを有ること無し」

『行者の因（四念〓行信）と果（教化地の果、五果〓仏果）は、皆浄土菩薩の回向（利他）に由るからこそ成就する』

〔浄入願心章の文〕

「因无して他の因の有には非ざるなり」

『清淨願心の因があるからこそ、他の衆生の往生成仏の因が成ずる』

『論註』二章の文をこのように読んだ上で、以下『論』『論註』の文と宗祖合採の文の関係を詳しく窺っていただく。

三、論註と宗祖の比較と問題点

先ず、『信卷』『証卷』の御自釈の文が、それぞれ『論註』の二章の文のどの語を取っているかを記せば、次の様になる。

・信卷 浄入願心章からの文 … 「因无して他の因の有には非ざるなり」「清淨願心」

利行満足章からの文 … 「一事として」「回向」「若しは…若しは…」

・証卷 利行満足章からの文 … 「若しは因若しは果」「一事として」「回向」

浄入願心章からの文 … 「因浄なるが故に果（亦）浄なり」「清淨願心」

次に『論註』の二章の文と宗祖の信証二卷の文と比較して、その考察すべき問題を挙げれば以下の様になる。

(1) 「行信」の語と、浄入願心章の文の関係如何

「行」「信」の語は、浄入願心章の文には無い、宗祖は、この語及び義を、どこより出されたのか。

(2) 「一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふ所に非ざることを有ること無し。」
この成文を信証二巻に同じく用いられる。その意は如何。

(3) 『信卷』『証卷』の「回向成就」の語

浄入願心章にも利行満足章にも、「回向成就」の語はない。この語は『論』『論註』の何処より持ち来たるのか。義としてどのように対応するのか。

(4) 利行満足章は菩薩の回向成就、『証卷』は如来の回向成就

利行満足章には、「菩薩…廻向利益他の行成就」とある。これは、菩薩の回向成就の意である。『証卷』は「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」とある。こちらは如来の回向成就であつて、両者の主体が異なる。

(5) 「因浄果浄」の語は、『信卷』には出さず、『証卷』に出す

浄入願心章の「因浄果浄」をの文を、利行満足章の「若因若果」の文と一連にして『証卷』に出す。

(6) 浄入願心章の因果は弥陀因果に約す、『証卷』は衆生因果に約す

浄入願心章の因果は、願心の因と莊嚴の果、一方で『証卷』の因果は、行信の因と証果の果である。この相違を如何に理解するべきか。

(7) 利行満足章の果は教化地、『証卷』は仏果

利行満足章の「若因若果」の「果」は菩薩の教化地の果を指す。一方で『証卷』の自釈は四法結釈であり、還相回向の前であるから、「若因若果」の「果」は仏果である。

以下、順次これらの問題を考えていく。

四、問題点の検討

○他因と行信の意味(1)

浄入願心章の「他因」とは何を意味するのか。今、四性計の他因の義などを考えず普通に読めば、これは『他の因』と読める。そこでこれを、仏より見て『他の衆生の因』、即ち『願生行者の往生成仏の因』と解せば、行信とは往因であるから、無理なく宗祖の文と相応する。

「他因」 Ⅱ 衆生の往生成仏の因 Ⅱ 行信

即ち、願心の因あるからこそ、衆生の往因（行信）が成就する意となる。

また、この様に読むと、この浄入願心章の文は『論註』の覈求其本釈の義とも対応することになる。覈本釈には、三

願が挙げられる。即ち、如来の因願が成就することによって、衆生の往因も成就するのである。これを覈求積には『往生は本願力に縁る』と釈される。

「凡そ是れ彼の浄土に生と、及び彼の菩薩人天の所起の諸行は、皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり。」

（『聖典全書三卷』424頁）

三願の中で、十八願の三信十念が、往因たる行信に相当する。弥陀の願心の因あればこそ、衆生の行信の因があるのである。

○「一事として」の意義（2）

「一事として」とは強調を示す語である。この語は利行満足章に出るが、浄入願心章の文も同じく二重否定の強調文であるが故に、これら二章を用いる信証二巻の文に、この語を共通に用いられたのである。

○回向成就の語（3）

「回向成就」の四字は善巧摂化章と障菩提門章に存するが、就中障菩提門章の文が用いられと考えられる。何となれば、障菩提門章の文は、正に如来の「回向成就」であることが次の宗祖『証卷』の訓より分かるからである。

「菩薩是の如き善く回向成就したまへるを知れば、即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離するなり。」

（『聖典全書二卷』146頁）

もしこれを浄土菩薩に約すならば、『回向成就するを知りたまへれば』等と訓ぜられるはずである。この『証卷』の訓の意は、如来が回向成就したまへる事を、浄土菩薩が知るのである。

浄土菩薩はこの如来回向成就によつて、即ち如来回向の法に乗じて、往還回向の行をなすのである。浄土菩薩の開導の回向によつて、衆生は行信を獲て共に往生する。その本は如来の回向成就である。この意味で『信卷』に

「若は行若は信、一事として阿・弥・陀・如・来・の・清・浄・願・心・の・回・向・成・就・したまふ所に非ざることを有ること無し。」

（『同』79頁）

と云われたのである。

浄入願心章の文は、「莊嚴成就」とあつて、「回向成就」とはないが、如来の願心莊嚴功德成就が、即ち如来の回向法の成就である。如来は回向を首として願力成就されたからである。願力成就の五念の法門は、園林門の如来の「本願力廻向」に摂せられるのである。

○菩薩の回向成就と如来の回向成就（4）

『証卷』には衆生の因果は「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」によるとある。一方で利行満足章では、衆生の因

果は菩薩利他によるとある（前述）。菩薩利他とは、直前の文の「菩薩は出第五門の廻向利益他の行成就…」の事を指す。

ここで、「菩薩…廻向利益他の行成就…」は菩薩の回向成就であり、『証卷』の「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」は如来の回向成就である。同じく「回向成就」というが、主体が異なる。これはどの様に解すべきかどうか。謂く。これは、如来の本願力回向の処に菩薩回向を撰して、撰末帰本して如来回向とされたのである。

○因淨果淨の引用（5）

淨入願心章の「因淨故果淨」の文は、『信卷』ではなく『証卷』に「因淨故果亦淨」と顯れている。

これは『信卷』は、行信の因を出すのみなるが故に用いず、後の証果を顯す『証卷』に至って総じて因果の釈をするが故に、これを『証卷』に用いられたのである。

○因淨果淨の二義（6）

淨入願心の『因淨果淨』の文と、『証卷』の『因淨果淨』の文は、次の様に内容が相違する。

・淨入願心章	∴	如来成仏の因果に約す
・『証卷』	∴	衆生往生の因果に約す

淨入願心章は、因淨果淨は如来成仏の因果に約す。「願心莊嚴」は、如来願心の因を以て如来淨土莊嚴の果を成ずる意である。

一方で『証卷』は、衆生往生の因果に約す。「若因若果」とは（論註も本典も）衆生の因果を指す。衆生は如来回向の因（行信、四念門）を獲て、証果（仏果、教化地の果）を得る。

然るに、内容は相違すれど、因淨なれば果淨なる道理はいずれにも通じる。故に『証卷』には「因淨なるが故に、果亦淨也。知るべしとなり。」と「亦」の字を加えて、衆生の行信の因淨なれば、亦当然に道理として、証果も淨と云われるのである。「亦」字は道理必然を示す。道理が同じである故に、淨入願心章の文を殆どそのまま用いられたのである。

○教化地の果と仏果（7）

彼土の菩薩の教化地の果は広門示現相であり、総じて五果全体も仏果の内容に他ならない。故に究竟仏果を釈す『証卷』では略門の仏果の辺で釈されたのである。（終）